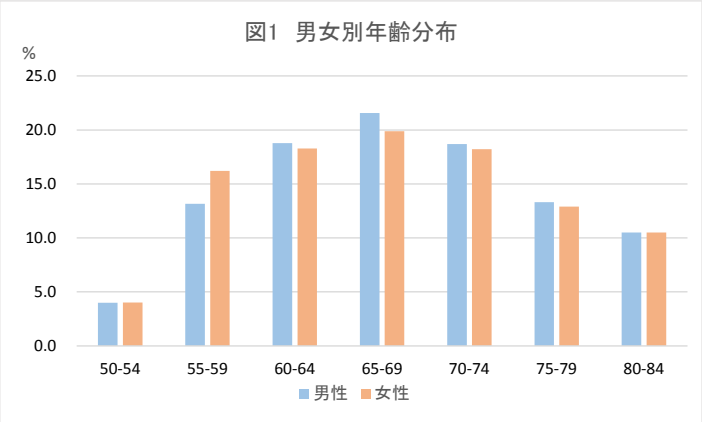
第 3 回「中高年者の生活実態に関する継続調査」結果の概要

本調査は、2010 年 8 月、日本に在住する 50～84 歳の男女 9,800 人を対象に実施した第 1 回目調査の回答者 6,442 人のうち、継続調査に同意を表した対象者への第 3 回目（2014 年 1 月～2 月実施）である。とりわけ今回の調査にあっては、従来の郵送配布・訪問回収法（留置調査）に加えて、詳細な職業経歴を聞き取る面接調査を実施した。調査票を配布した 3,096 ケースに対して、回収率はそれぞれ、留置調査 86.7%（2,685 ケース）、面接調査 77.0%（2,385 ケース）であった。ここでは第 1 回目～第 3 回目の留置調査への回答者について結果の概要を示す。回答者の年齢分布は図 1 の通りで、調査対象者の 4 割以上が 70 歳以上であった。

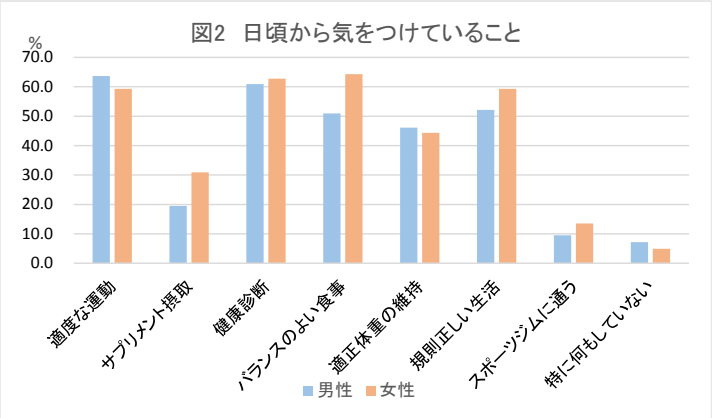


世帯構造の分布は、一人暮らし 11.0%、夫婦のみ世帯 34.4%、核家族（未婚子とのみ同居）28.2%、三世代世帯 12.3%、その他世帯 14.3%であった。第 1 回目以降、世帯構造が変化した者は全体の 23.2%であり、年齢が上がるにつれて世帯構造に変化がなくなってくる。事実、2010 年以降、世帯構造に変化がないとした者の割合は、64 歳以下層 72.9%、65～74 歳層 78.9%、75 歳以上層 79.3%であった。

調査時点で仕事に就いている者は全回答者の 45.9%で、そのうち 2010 年から就労を継続している者は多数派の 92.8%であった。2014 年時点で、仕事をしていると回答した 75 歳以上の高齢者は男性 18.8%、女性 10.5%であった。一方、65 歳以下男性の 84.5%は仕事に就き、対応する女性の値は 65.3%であった。

【健康への高い意識】

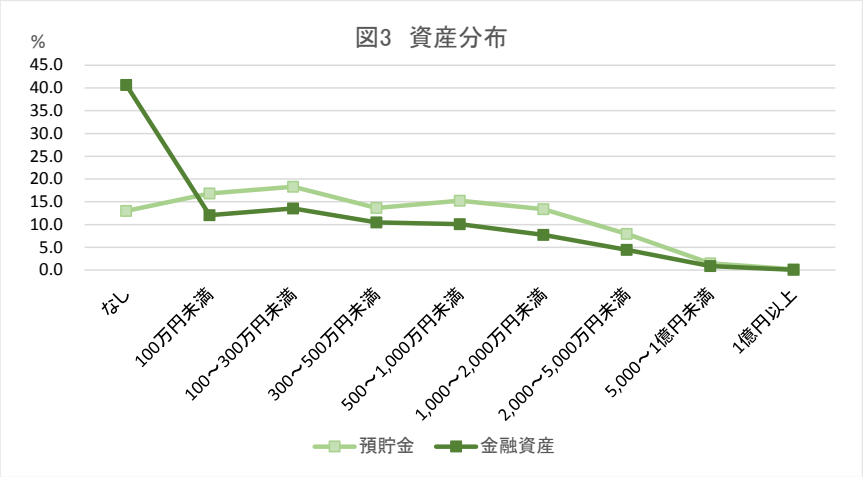
図 2 は「日頃、何か気をつけていることはあるか」という質問に対する男女別の回答である。健康診断と適正体重の維持については男女で大きな差は認められなかったが、全体として女性の方が「日頃から気をつけている」と回答した割合が高い。サプリメントを



摂り、バランスのよい食事に気をつけて、規則正しい生活を心がけるとする割合は女性の方が高く、健康維持に対して積極的な中高年女性の姿が確認された。その一方で、少数ではあるが「特に何もしていない」とした回答者もおり、例えば、64 歳以下男性の 12.0%は健康に対して無関心であった。もっとも、この結果は、自分の健康を構う時間的余裕がない状況とも解釈できる。

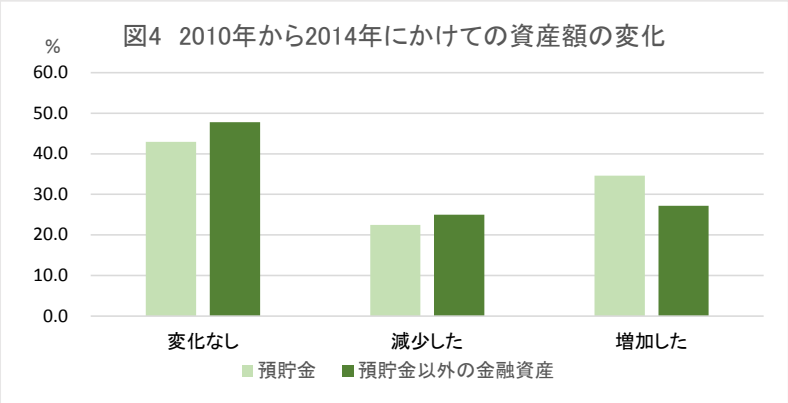
【資産の変化】

本調査では、預貯金と有価証券や生命保険といった預貯金以外の金融資産について質問している。回答者の資産分布は図 3 に示すとおりである。預貯金以外の金融資産を全く持たない者は 40.7%であって、保有する場合の金融資産額は 500 万円未満が 60.8%であった。一方、1,000 万円以上の金融資産を保有しているとした者も 22.1%いた。預貯金についてはゼロとする者は 13.0%で、貯金があるとした者の 56.1%の貯蓄額は 500 万円未満であった。一方、1,000 万円以上の貯蓄を有するとした者は 4 分の 1 以上の 26.4%であった。



第 1 回調査の 4 年前と資産の状況を比較すると（図 4）、預貯金について変化なしとした者は 43.0%、減少したとする者は 22.4%、増加したとする者は 34.6%であった。預貯金以外の金融資産についても類似の結果が認められるが、預貯金の場合と比較すると、「減少した」者の割合が高い。

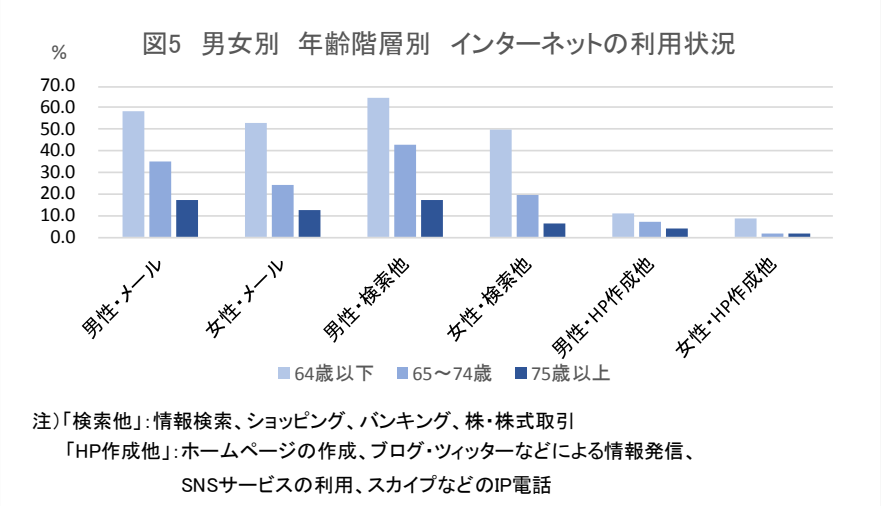
持ち家以外の資産（預貯金、株式・債券、生命保険・損害保険、持ち家以外の不動産、田畑・山林、絵画・骨董品・貴金属等、その他）の項目別所有の有無を合計すると、いずれの資産も持っていないとした者は 7.9%、1 つの資産のみ所有する者は 28.6%、2 種類を保有する者は 34.0%で、資産の種類として預貯金と生命保険・損害保険が代表的であった。



【積極的なインターネット利用】

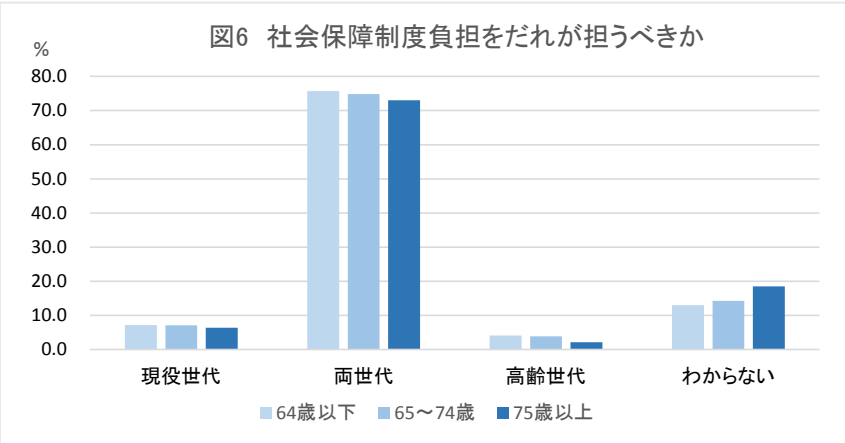
子どもや孫たちとメールをやり取りし、旅行での写真をブログにアップする。銀行口座をネットで確認して、持ち運びが重いミネラルウォーターはネットで注文して配達してもらう。そんな状況は決して珍しいことではなくなってきた。本調査では、パソコンや携帯電話からのインターネットの活用状況を質問した。具体的には、電子メール、情報検索、ショッピング、銀行口座照会等ネットバンキング、株・為替取引、ホームページの作成、ブログ・ツイッターからの情報発信、ソーシャルネットワークサービスの利用、スカイプなどの IP 電話、の 9 項目である。

図 5 は、男女別・年齢別にその利用の有無をみたものである。ここでは大きく 2 つのことを確認できる。一つは、中高年層の中で、IT リテラシー（インターネットを自由に使いこなす程度）は年齢差が大きいことである。二つは、女性に比べて男性の IT リテラシーが高く、より積極的にインターネットを活用している状況がわかる。



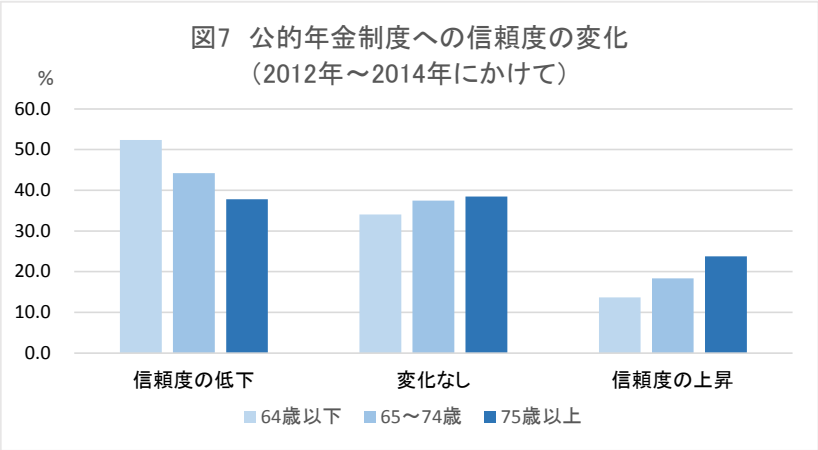
【世代間の助け合い】

少子高齢化は世代のアンバランスを生む。本調査では、現役世代と高齢世代の負担のあり方について質問した。その結果が、図 6 である。年齢階層別の意見の分布は 5% 水準で違いはあるものの、世代を通して、多数派が現役世代と高齢世代が共に負担すべきであると回答している。ただ、高齢層になるほど「わからない」と回答する者が増え、その背景には、負担したくとも実際に負担することができるか自信がない、といった複雑な心境があるのかもしれない。



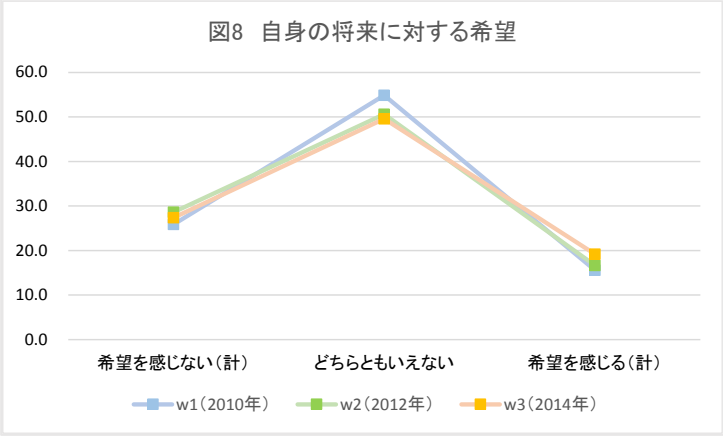
【公的年金制度への信頼】

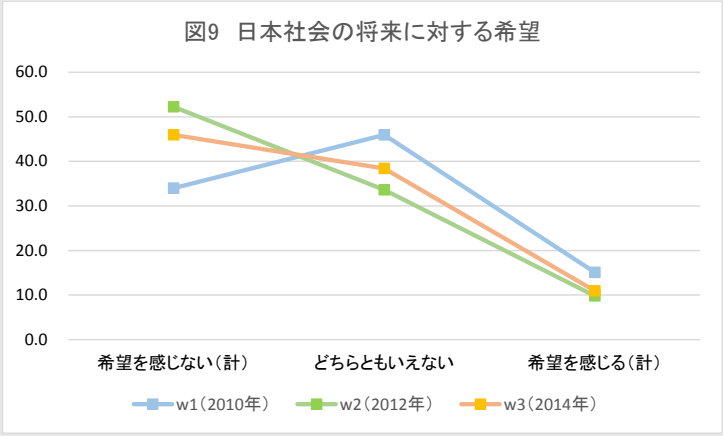
第 1 回目調査から様々な事項への信頼度について質問している。家族に対する信頼度は 3 回の調査を通じて高く、8 割以上の多数者（「全面的に信頼している」「信頼している」の合計）が家族を信頼しているとしていた。一方、公的年金制度についてみると、信頼すると回答したのは第 1 回目調査 17.6%、第 2 回目調査 7.8%、第 3 回目調査 13.1%、と概して低い。2012 年に実施した第 2 回目調査から 2014 年の第 3 回目調査にかけて公的年金制度への信頼度は上昇した。しかしながら、対象者個々人の意見の変化をみてみると、64 歳以下層を中心に、公的年金制度への信頼が低下していた（図 7）。



【将来への希望】

図 8 と図 9 は、それぞれ、本人自身の将来への希望と日本社会への希望の変化を 3 時点で比較したものである。ここでの最も興味深い結果は、自身の将来に対する希望の意識分布は大きく変化していないのに対して、社会への希望意識が悲観的になっていることである。2010 年から 2012 年にかけて、日本社会の将来に希望を感じないとした者は 34.0%から 52.2%へと大きく上昇し、その背景には 2011 年に発生した東日本大震災があるのかもしれない。しかしながら、2012 年から 2014 年にかけて、日本の将来に対する希望はやや持ち直してきた。





注）「希望を感じない（計）」は「希望をまったく感じない」「希望を感じない」の合計、「希望を感じる（計）」は「希望を感じる」「とても希望を感じる」の合計、「わからない」は省略した。